



口腔咽頭の臨床 第3版

日本口腔・咽頭科学会 監修

● A4・頁220 2015年9月

定価：本体15,000円＋税

[ISBN978-4-260-02163-0]医学書院刊

『口腔咽頭の臨床 第3版』がこのたび出版された。本書はこの領域における揺るぎない良書であり、日本口腔・咽頭科学会が1987年に設立されて以降、1998年に初版が、2009年に第2版が、そして2015年に第3版が上梓されるに至っている。学会が監修している権威ある臨床に役立つテキストが、日本口腔・咽頭科学会理事長の吉原俊雄先生の先導によりさらなる改訂がなされ、パワーアップされている。

本書の第一の特徴は、耳鼻咽喉科のみならず他科との境界領域となる口腔咽頭というきわめて複雑かつ多機能な頭頸部の重要な部位を取り扱っており、全身疾患との関連にも焦点を当てていることである。内科、外科、小児科、整形外科、形成外科、皮膚科、歯科などを専門とする医師にとっても有用な書になっている。第二に、構成が簡潔明瞭で、図表・写真の占める割合が大きいことである。基本的に左頁にテキスト、右頁に図表・写真というコンパクトな構成をとっている。項目も疾患の定義、症状と所見、診断、鑑別診断、治療、予後とコンパクトで明解である。第三に、新たな概念・知見・手術手技などが追加提示されていることである。診断推論や臨床推論の力強い助けになる有用な情報が潤沢に盛り込まれており、日々の診療現場での活躍が期待できよう。

また本書は、われわれ内科医にとって口腔咽頭領域の内科診断学のマージンを大きく広げてくれそうであ

る。視診、触診は行わなければ得るものがなく、行っても情報処理が稚拙であると、やはり益が少ないことになる。この書にのっとって診断学のベースアップを図り、治療につなげられることを期待したい。内科のみならず、頭頸部の領域を専門としない他科においても同様なことが言えると思う。

膠原病内科の立場からは、扁桃疾患、唾液腺疾患に関しての貴重な情報が得られる。古典的な疾患の特徴的局所所見は強く印象に残るものである。

新しい疾患概念から抽出されたIgG4関連疾患は、高IgG4血症、IgG4陽性形質細胞浸潤線維化によるものであるが、耳鼻咽喉科的側面からの検査は特に重要であり、涙腺、唾液腺に特徴的な所見が存在する。本書にはIgG4関連疾患包括診断基準の提示があるが、あくまで最低条件を確認する基準であることから、臨床像に加え局所の病理学的所見が重要であることが強調されている。IgG4陽性形質細胞浸潤の存在と著明なリンパ球、形質細胞の浸潤は見逃せないものであるが、さらに花びら線維化、閉塞性静脈炎の合わせて3つの形態学的特徴を呈してくることなど、本書では丁寧に説明がなされている。このあたりは、生検臓器、部位の適切かつ経験的な卓越した標本採取にかかわる専門の書として貴重な表現が多々見受けられ、感慨深く、見事に重責を果たしている書と感服させられる。